

国際天文学連合総会開催までの道のり 成功裡に終わったIAU総会



去る8月17日から30日まで国立京都国際会館で開かれた第23回IAU総会は、すでにご存知のとおり、成功裡に終わった。最初にご存知のとおり、成功裡に終わった。最初に予想したより300人以上も多い1936人のIAUメンバーと招待者が参加した（同伴者を除く）。そのうち日本人は731人であった。この参加者数はIAU総会が始まって以来5番目である。提出論文は口頭講演777、ポスター論文1069に及んだ。

ブエノスアイレスでの第21回総会までは出席者数が減少傾向にあった。それを喰い止める策として、第22回のハーグ総会から、いわゆるオランダ方式が導入された。IAU総会のある年には各地でのシンポジウムは開かないこととして、総会の場に6つのシンポジウムを集中させる。すると、総会参加者はいろいろなシンポジウムを渡り歩き、多くの人に会うことができる。ハーグでは評判が良かったので、もう一度やってみるようになっていた。日本という地理的には比較的遠い位置にあっても、それだけ多くの人々が参加したことは、オランダ方式の成功を意味すると考えてよい。

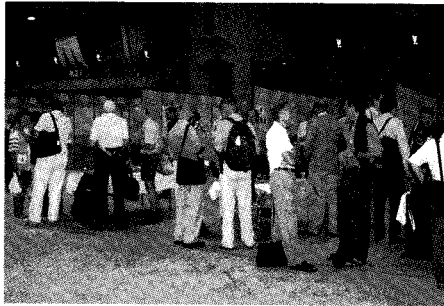
プログラム等については既に本誌に紹介されている。実際にあった論文や話題については、それぞれ専門の方からの紹介もあるだろう。また、個々の事柄は組織委員会から詳しい報告書が出されることになっている。日本学会会議が編集する「学術の動向—JSCニュース」誌にも総会そのものの成果を報告する。そこで、ここでは天文学会向けに、総会に至る過程も含めて、私でないと書くのが大変な事柄を述べさせていただくことにする。

10年前からの懸案

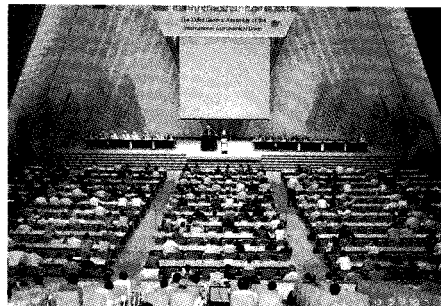
20回余を数えるIAU総会のうち、これまでアジアで開かれたのは1985年のデリー総会1回限りであった。日本の天文学の進展を見るとき、日本でまだ一度も開かれたことがなかったのは、むしろ不思議であった。この問題は10年あまり前からくすぶっていた。私は1988年から学会会議の会員と天文学研究連絡委員会（研連）の委員長を仰せつかったが、その第1回の研連（委員会議）の議事録に「IAU総会を日本で開催することの意義と問題点が議論され、1994年に日本に総会を招致するのが適切である」という意味のことが書かれている。

その研連は1988年ボルチモア総会のすぐ後のことであった。その時、私は財務小委員会（総会で財務について監事のような立場から行なう報告の起草委員会）に出席したが、ボルチモア総会で一人あたり10万円の費用がかかっていることが問題になった。今後総会を開催する国が大変だというのである。日本は物価高でもあるし、学問を取巻く環境が西欧ほど成熟していないので、さらに大変である。こうして、若い人が広く国際的な場を経験すること、日本の天文学の進展を実際に見てもらうことなど、日本開催の意義が論じられても、「私を中心になって進めよう」という人は現れなかった。そして、役職上、私がそれを引き受けざるを得ないことになった。

最初のうちは安泰であった。1994年は近すぎるし、ブエノスアイレスに次いで遠い地で開催するのも、ということもあって、1997年を考えることになったからである。大きい会を日本へ呼ぶことに関して、「ロビー外交で取って来ました」などと言わ



イベントホールに設置されたポスター会場



メインホールでの閉会式

うことであった。その裏は、京都市地下鉄の国際会議場への延長が間に合いそうだと分かってきたからである。バスを借り切って出席者をホテルから会場へ輸送するのに比べると1000万円を超える節

約になる。れるが、そんな問題はなかった。もちろん外交はしたが、当然あるべきこととして賛成してもらったのである。そして1992年春には、当時の天文学会理事長の田中靖郎さんとIAU日本国内委員会(National Committee, 研連が兼ねる)委員長としての私との連名で正式の招待状をIAU会長(当時, A. Boyarchuk)に送った。そして総幹事(当時, J. Bergeron)が、1993年春、会場の視察に来日する運びになった。

しかしそのことは研連では詳しく説明しなかったもので、「IAUの言いなりになって京都に変えた杉本は軟弱である」との批判を蒙ることになった。そして、「京都になって組織委員会に余分の費用がかかるようになって、外国人出席者への旅費補助は減らないのでしょうか。」と詰問された。それには、「出しますがいくらの予算を計上できるか分かりません」と言って、さらに批判を蒙るしかなかった。当時、すでにバブルは崩壊し、総会開催時までには不況から立ち直ることを祈るだけしかなかったからである。こうして、「物事はすべて筋道を通してデカルトの論理で議論し、会議に諮って進めるべし」という立場の人からは、その後も非難されどおしであった。しかし赤字を出したら個人的にでも責任を取らなければならない立場の人と正論を言っていればよい人とは違うというのが、私の言い分である。しかも総会を開催するという社会的事象では、原因があつて結果が導かれるという単純な論理で物事は進まない。物理・天文現象でも、そのような論理が通るのは、結果から原因へのフィードバックが無視でき、摂動論で記述され、グリーン関数で表現できる場合だけである。非線形現象では、原因と結果が絡み合って分離できず、系の状態や機能は総体として決まっている。それは生命科学などで強調されるオートポイエーシスの状態である。私は反論するよりは、じっとこらえて、結果を見てもらうことにし

た。会議で納得するまで議論している時間は、委員の方々にも私にも取ることが出来ない。

▶ 学術会議との共同主催

学術会議は国際会議を学会等と共同して主催する予算枠を持っている。当時は年間6件で、1件あたり1000万円たらずの予算が割当てられた。IAUは国際学術連合(ICSU)を構成するユニオン・メンバーの1つであり、日本は学術会議をとおしてIAUに加入しているのだから、IAU総会は当然共同主催にすべきものであろう。もっともIAU総会全体の予算から見ると、学術会議からの予算は共同主催と言えるほどの額ではないが、われわれの予算状況からみると大金である。そこで、1994年暮れ、当時の天文学会理事長であった内田豊さんの名前で申請した。共同主催にすると、会場の「国立」京都国際会館の使用料に割引があるとか、会議出席者の大学が文部省に出席旅費の別口概算要求ができるなどの特典もある。そして1996年6月に閣議了解された。

▶ 組織委員会を作る

国際的な物事を行うとき、国際的な組織形態と国内から見たものが異ならざるをえない場合がある。総会を開催するのはIAUであり日本側はホストであると、IAUは言う。しかし、国内で予算をとるには、日本側が開催するとしなければならない。そのうえ、学術会議は、その組織形態を学術会議のひな型に完全に一致させよという。こうして出来上がったのは、二重構造の組織である。国内側から見ると、共同主催者である天文学会は運営委員会を設置する(委員長は当時の前理事長の内田さん)、学術会議は国際会議委員会(委員長は杉本)を設置する。1996年8月にこの2つが合意書を交わし、組織委員会を成立させた(委員長は杉本、総務幹事は福島登志夫、経理委員長は有本信雄)。学術会議側は国だから募金はできないので、募金委員会は天文学会側につける。その委員長には藤

田良雄先生、副委員長には三菱電機社長の北岡隆さんをお願いした。募金を進めるためには、寄付金に対する免税措置を受けられるようにしなければならない。そこで寄付金の受け入れは、特定公益増進法人である日本学術振興会にお願いすることにした。

これらの組織を運営するためには、それぞれの規約を作らなければならない。少なくとも事業の終了後に会計の監査を受けなければならないが、それが準拠すべき規約を前もって作っておかなければならないのである。こうして天文学会の評議員会承認で作られた規約(の略称)は、国際会議共同主催に関する内規、運営委員会運営規定、会計規約、募金規約である。共同主催に関する内規では、国際会議の会計は天文学会から切り離して行うこと、したがって赤字が出たときは運営委員会なりそれが後に作る組織委員会なりが責任を取ること、それに伴って、会議開催の進めかたについても、責任をとる委員会に委ねることが規定されている。逆に黒字が出た場合には、天文学会理事会がその処理を決めることになっている。これは不平等に見えるかもしれないが、そうしておかないと、会議開催の臨時組織は終了して解散することが出来なくなる。会計は整理に奮闘中であるが、幸いにして赤字は出さずに済んだようである。

以上は国内から見た組織だが、IAU側から見ると次のようになっている。ホストとしての仕事はLOC(Local Organizing Committee)がすると考える。これが実際上、IAU本部、シンポジウムの組織委員会、各IAUメンバー等との連絡にあたり、会議のほとんどを準備する。それにNOC(National Organizing Committee)をつけ加えるのが慣例であるが、これは事業をするときに国内諸機関との関わりが必要になるからである。さらにAdvisory Board(顧問)をつけることは、多くの会議でしばしば見られる。そこで、国内から見た組織との関係としては、NOCとLOCのメンバーを運営委員会と国際会議委員会のメンバー、すなわち組織委員会のメンバ

一に割り振り、両者を同時にきめた。LOC と NOC は組織委員会を別の側面から見たものにしたというわけである。

委員は名前だけ出して実際は他の人が下請けで行なうことになるのは避け、実際に手を下してくれそうな人をお願いすることにした。それまでは準備会と称して行っていたのを、正式に第1回の LOC 会議に引き継いだのは1995年1月にさかのぼる。しかし実際の活動は思ったようには始まらなかった。実際に動いてくれる人に頼んだつもりだったが、それぞれ忙しいとか時間の都合が合わないとかで会議を開くのは困難だったし、IAU の IB (Information Bulletin, すべての IAU メンバーに配布されるサーキュラー) の原稿を作るなど期限のある事柄に対応する機動性をひき出すのは難しかった。

そこで、結局は、もう一段若い人で天文台にしばしば集まることのできる人に参加してもらって進めることにした。その集団につける名前に困ったが、実務会とした。そして次第が増えていく実務会のメンバーは LOC のメンバーに加えることにした。その結果、LOC + NOC は、当初とは異なって組織委員会より大きくなってしまったが、LOC のメンバーの名前は IAU の IB に追加掲載していくことができた。こうして、最初は17名だった LOC メンバーは、総会開催時には41名になっていた。とくに総会の半年前になると、関西、関東共、多くの若い仲間が献身的に協力してくれた。総会終了時の IAU EC (Executive Committee, 執行委員会) でも、若い人たちと共同して作り上げた総会として、高く評価された。予算の関係で手作りの総会にするしかなかったのだが、若い研究者の参加者意識を高めてもらった効果は大きい。

はじめのうちは、国際会館側からコーヒーは1杯500円だとか、イベント・ホールに外から飲食物を持ち込んではいけないだとか言われたり、会場費の見積書をよく見ると OHP など機器の使用料がきわめて高かったりしていた。しかし結果については総会の会場で見られたとおり、われわれの仲間の

努力によってほとんどのことが解決されていた。それによる経費の節減は、前者、後者共にそれぞれ500万円程度に及ぶものになった。これらのこまごましたことも、最初のうちは私が問題点を指摘しなければならなかったが、LOC を増強してからはそれぞれが担当して、適切に処理してくれるようになり、私はそれから手を引くことが出来るようになった。

出席者への旅費補助など

日本で総会を開催するのだから、アジアの人たちが多く参加できるようにして、アジアにおける天文学の発展を助けるものになりたい、という考えは初期の段階から天文研連で議論されていた。それには2つの事柄があった。先に述べたオランダ方式にもかかわらず近くの外国でサテライト・シンポジウムが開けるようにしようということと、外国からの出席者になるべく多くの旅費(滞在費)の補助をしようということである。

前者については、韓国の、あるいは中国の誰それをよく知っているから話をもちかけるという提案があったので、そのとおりにしてもらった。そしてハーグでの IAU EC に出席してその意義を述べ、特別のケースとして認めてもらった。しかし、ハーグ総会の際にそれらの国々の人と話して感じていたし、その後、私が直接にその国を訪問した機会に話合ってみて分かったことは、いずれも「出来たらサテライト・シンポジウムを開いてもよい」という程度にすぎなかった。実際、ある国では研連委員から連絡してもらった人よりも若い世代に交替が起こってしまっていた。そして、その国で計画されている国際会議を考えると、IAU 総会時までは無理だといういことであった。こうして、この話は実質上打ち切りとなった。

後者の旅費補助は苦慮した問題である。経済会からの寄付は、不況のせいもあって見通しがよくなかった。最初の予算書には、2150万円の外国人旅費(滞在費)が計上してあったが、逆にいろいろ

るな社交行事にかかる費用はほとんど計上しなかった。そのような費目のものまで企業等からの募金に頼るわけにはいかない。この矛盾を解決してくれたのは、古在由秀先生が天文学会員を中心に呼掛けてくださった個人募金で、総額約 1500 万円にのぼる寄付をいただいた。このうち、一人で 30 万円を超える大口寄付が合わせて 500 万円余りあった。1000 万円ほどは、多くの人たちの、総会を成功させようという温かい援助による。こうして、1760 万円（実績額、学術会議負担分 71 万円を含む）の旅費補助を配分することができた。

一方、IAU のほうからは、いつものとおりの IAU シンポジウムに出す旅費補助が 6 件分のほかに、国際的に集められた寄付金も含めて約 4000 万円の補助が行なわれた。LOC はそれらの大金を出席者に手渡すという大変な、しかし嬉しい事務を分担することになった。LOC が出した補助は、LOC グラントとして IAU のものとは別に申込を受け、LOC の自主性で配分した。以前の総会では一旦 IAU に納入し、IAU グラントとして配分されていたが、今回は IAU 本部と交渉して方式を変えたわけである。

出席者の経済的負担などに関しては、これまでの総会に比べて特段の配慮をしたつもりである。バンケットなどの社交的行事には、参加者から一部ではあるが負担金をとるのが通例であった。そのため、通貨事情が悪く負担金を払いにくい国からの参加者に不平等が出ているという問題を、私は毎回感じていた。そのうえ一部の費用だけを負担金として集め、残額を LOC 予算から補助するなら、寄付金なども含む予算を、逆にお金の自由になる参加者につき込むことになる。そこで一部負担金を集めるのはほぼ全廃することにした。そうすると参加者数が増えるので、LOC としてはより大きい出費になるが、筋を通すことのほうが大切だと考えた。それが実際に可能になったのも個人寄付によるところが多い。

出席者に対するこれらの配慮は、総会終了前の

IAU EC で、とくに（その時点では前）会長のウォルチェからも特別のコメントがあり、評価された。この事も含めて、今回の総会ではこれまでとは異なったことをいくつかしたつもりである。これまでと同じようにすべしとの意見の方が強かったが、これまでとの違いを数えることの方が、研究者としての私には楽しい。

IAU とのかかわりについて

今回の総会では、いろいろな面で若い研究者が多数参加した。それがこれまでの傾向を変えるものになればよいがと願っている。というのは、目先の研究に忙しくて IAU とか他の組織のことに関わっている暇なんか無いという風潮が最近はとくに盛んになってきているからである。しかし今回の総会では、国際的につき合うことの楽しさとか、それが自分の学問を進めるのに役立つことなどを、若い研究者が直に感じてくれたと思っている。

IAU 総会を次に日本で開催するのはかなり先のことになるだろうが、それまでに何度かの IAU シンポジウムを日本で開催する機会があるだろう。これも積極的にコミッションやディビジョンと（十分に早い時期から）交渉する必要がある。科学組織委員会（SOC）を構成して学問的内容を作り上げる段階から、それについて他のコミッションなどの賛同と支持を得て、EC で他の提案に負けないように採択されるためには、研究者仲間の付き合いと人脈が関係することもまた事実である。

今回の総会では、日本人が SOC 委員長になったシンポジウムは 4 つあった。Joint discussion を委員長として組織した人も 4 名あった。それらは、今後はより若い人たちが中心となって進めていくべきものである。若い人が動かないと物事が進まないことを示すために、私は今回の総会を若い人たちと共に作り上げ、そして LOC メンバーとしてその人たちの名前が表に出るようにすることなどに、とくにこだわったのである。

杉本大一郎（組織委員長、放送大学）